

〈論考〉

1964年のナショナリズムと東京オリンピック

——文学者たちの言説をめぐって——

坂上 康博 一橋大学大学院社会学研究科教授

はじめに

日本が敗戦と占領という屈辱から抜け出し、高度経済成長への助走が始まる中で開催された1964年の東京オリンピック。それは、国際社会への復帰を人々に印象づけることによって、戦前の負の記憶を払拭し、日本人としての誇りを取り戻すひとつの重要な国家的イベントとなったとされる。またそれは、ロバート・ホワイティングが自伝的な著作の中で、

昔とは違う新しく生まれ変わった日本が、今ようやく世界に向かって紹介されたのだ。日本はもはや戦争で打ち負かされた世界の除け者の軍国主義国家ではなく、世界の経済を牽引する平和的な民主主義的国家へと見事に変身してみせたのだ。東京オリンピックによって日本が今や西洋諸国と同等であり、尊重されるべき勢力となりつつあることが示されたのだ。天皇、日の丸の旗、国家としての「君が代」（当時はまだ非公式だったが）、（自衛隊という形での）日本兵の活動など、かつてアジア太平洋地域の隣国に対して日本の脅威の象徴として機能していたものが、今やまったく異なる健全な姿で表舞台に出てきたのだ。¹⁾

と述べているように、天皇、日の丸、君が代、軍隊というかつての「日本の脅威」の象徴がリニューアルされて再登場する機会ともなった。

これらは日本の戦後史における重要な変化に他ならず、すでにその実態や歴史的な位置および意味を問う学問的な検討も始まっている。ナショナル・アイデンティティの再構築の問題に照準を定めてこのテーマに正面から挑んだクリスチャン・ターグソルトの研究、「成功神話」に彩られてい

る東京オリンピックの脱神話をめざした石坂友司らの研究などがそれであり²⁾、また、かつての「日本の脅威」の復活に関してもすでにいくつかの研究がなされている³⁾。それらは、東京オリンピックの歴史的な位置や意味を広い視野から問う／問い直す重要な試みであるが、当時を生きた人々の意識や感情については、いまだに十分な掘り下げがなされておらず、そのことが問題の動態的把握や複雑な内実への接近を妨げているように思われる。

こうした問題意識にもとづいて、本稿では、東京オリンピックによって喚起されたナショナリズム——ナショナル・プライドやナショナル・アイデンティティを含むナショナルな意識や感情の総称——に焦点を絞り、その内実と歴史的位相への接近を試みる。具体的な分析の対象とするのは当時の文学者たちの言説である。

東京オリンピックでは、多くの文学者たちが、新聞社や出版社の要請を受けてオリンピック観戦記や印象記などを執筆した。講談社編『東京オリンピック——文学者たちが見た世紀の祭典』と石井正己編『1964年の東京オリンピック——「世紀の祭典」はいかに書かれ、語られたか』の2冊だけでも、合わせて49人の文学者による105編の観戦記や印象記、座談会の記録が収録されている⁴⁾。彼らの文章は、オリンピックを賛美するものばかりはない。オリンピックへの批判はおろか無関心であることさえ許されない「空気」に日本中が覆われ⁵⁾、テレビをはじめとするメディアが国民の熱狂を煽る中でも、自身の立脚点に立って果敢に筆をふるった文学者も少なくない。それらは、誇るべき——しかし忘却されてしまった——東京オリンピックのひとつのレガシーに他ならないが、それらについては別稿⁶⁾にゆずり、ここではナ

シヨナリズムの問題が顔をのぞかせている小田実、奥野健男、山口瞳、三島由紀夫、平林たい子、曾野綾子、石原慎太郎の計7名の文章や発言を取り上げる。

ちなみにこの7名のうち、平林たい子(当時59才)以外の6名は32～39才という比較的若手の作家や評論家であるが、全員がアジア太平洋戦争の体験者である。この6名のうち、最年少の石原慎太郎は、敗戦時に12才、最年長の三島由紀夫が20歳であり、青少年期が戦争の時代と重なっている。彼らにとってナシヨナリズムとは、身をもって体験した戦時下の狂信的なナシヨナリズムとの関連を抜きには語り得ないものであったはずである。

1. 小田実

まずは、自身の世界一周旅行記『何でも見てやろう』で人気を博し、東京オリンピックの翌年には「ベトナムに平和を!市民連合」の中心的なメンバーとしても活動していく小田実(1932－2007)を取り上げよう。小田は、東京オリンピック終了直後に書いた評論のなかで、「今度のオリンピックで私がおそれていたそのひとつは、ナシヨナリズムの無責任な賛美だった。そして、そのおそれは、幸いなことに、かなり期待にはずれなかった」といい、「一つには、日本チームがふるわなかったことに、原因があるだろう」と指摘する⁷⁾。

日本のお家芸の水泳で、日の丸があがったのは、全種目の最後の八百メートル・リレーだけだった。圧倒的なアメリカの勝利。誰かが冗談まじりにいったことは、「うちの坊やは、君が代は知らんが、アメリカ国歌なら知っているよ。あれは“オリンピックの歌だ”というんだ」

日の丸がどんどんあがり、君が代が、じゃんじゃん鳴り響いていたなら、人々のナシヨナリズムもいやがうえにも喚起されていたことだろう。その喚起は多くの場合、人を狂信、

熱狂にかりたてるのだ。

ナシヨナリズムに酔うこと自体がわるいというのではない。

酔うことによって、たとえば、酔わない人、酔えない人を「なんだこいつは」と白い目で見始めることがおそろしいのである。

その白い目でとりかこまれるとき、酔わない人もまた、酔ったポーズをとらなければならない。そして、そのポーズをとっているうちに、その人もまた、ほんとうに酔い始める。

ナシヨナリズムの脅威を小田は、その「無責任な賛美」がもたらす同一化圧力とその排他性、暴力性にみている。しかし、君が代、日の丸のシーンが少なかったためにそうした事態が起こらずにすんだというのだ。

日本は、この大会で金メダル16個、銀5個、銅8個を獲得し、金メダル獲得数で世界第3位となった。表彰式で君が代が吹奏されたのは計16回。少ないわけではなかった。たとえば、当時小学校4年生だった鶴飼哲は、「金メダルラッシュだった。表彰式に上がる選手とワンセットで日の丸が掲揚され、君が代が流れる。テレビニュースで何度も繰り返された。自分の人生であんなにも、日の丸と君が代に触れた時間はなかった」⁸⁾と回想している。日の丸と君が代のメディア露出自体は、まさに空前絶後のものであったといっていだろう。その影響力も小さくはなかったはずだ。

小田が例示したのは、日本の水泳の不振である。日本の男子水泳は、1932年のロサンゼルス・オリンピック、1936年のベルリン・オリンピックで世界一の座を獲得し、戦後国際舞台での活躍が閉ざされた時期にも古橋広之進などの活躍があった。こうした過去の栄光を知る人々にとっては、水泳は「日本のお家芸」という自負があり、それゆえにその惨敗とかつてのライバルであるアメリカの圧勝が、大きなダメージを与えたのである⁹⁾。

さらに16個の金メダルの内訳をみても、体操5、レスリング5、柔道3、ボクシング1、ウエイトリフティング1、そして女子バレーボール1という比較的マイナーな種目や新規採用競技

に偏っており、また、まさしく「日本のお家芸」である柔道の無差別級決勝での敗北も、イアン・ブルマが「国家の男らしさという最も繊細な部分が曝された」¹⁰⁾と指摘しているように、人々に大きなダメージを与えた。さらにマラソンの円谷幸吉が最後の200メートルでイギリスのヒートリーに抜かれて3位となったこともそれに加えていいかもしれない。こうしたことが、ナショナリズムの喚起に対する一定の歯止めになったということはいえるだろう。

ところで、小田が日本選手の優勝にともなう人々の熱狂を全面否定しているかというそうではない。「無責任な賛美」がもたらす同一化圧力とその排他性、暴力性を小田が批判したことは先にみたとおりが、「日の丸があがるとやはりうれしい——そういった素朴な気持ちをもつ。それがナショナリズムだ」といい、こうした素朴なナショナリズムについては肯定している¹¹⁾。そのうえで、

ナショナリズムは、目的ではない、それを目的としたことにおいて、過去の悲劇が起こった。ナショナリズムは、いわば出発点なのだろう。

その出発点から出発して人は、どこへゆくか。ナショナリズム自体に導いてもらってゆくかぎり、それは、狂信的な国家主義となるほかない。わが祖国のすべてが善、といったことになるほかはない。

それでは、なにによって導かれたらいいのか。

理性、冷静な理性——私は、そんなふうに答える。

という。小田がいう「狂信的な国家主義」が戦時下のナショナリズムを指していることは明らかであろう。そうした事態を小田はナショナリズムの自己目的化と呼び、こうした「悲劇」の再来を阻止すべく、ここでは理性によるコントロールの重要性を訴えたのだ¹²⁾。

さらにもうひとつ注目すべき点は、小田が「新興国のナショナリズム」を肯定していることである。「オリンピックに参加した多くの加盟国にとつ

て、オリンピックはあくまでナショナリズムにむすびついたものであり、また、そこにおいてのみ意味があるのだろう。私もまた、開会式で戦後あらたに独立したアジア・アフリカ諸国の選手が国旗をかかげてスタジアムにはいって来るのを見たとき、そのことを理解した」、私は「新興国のナショナリズムに無批判にかぶれてしまった」というのである。東京オリンピックにはアフリカの22カ国をはじめ戦後植民地から独立した国々が参加したが、そうした「新興国のナショナリズム」に小田は強い共感を覚え、明確な支持を表明しているのである。東京オリンピックは、この新たなナショナリズムを鮮やかに表象する場でもあったのだ。

「新興国のナショナリズム」は、敗戦後、日本において否定されてきたナショナリズムの肯定的な側面への再評価を促す転換点となり、さらにはナショナリズムという言葉自体が「戦後に大手をふって使われる」ようになる上でも決定的な役割を果たしたとされる¹³⁾。小田もまた、こうした戦後日本におけるナショナリズムをめぐる議論をふまえながら、オリンピックで自身が実感した「新興国のナショナリズム」について率直に綴ったのだろう。

小田は、IOC会長ブランデーが「オリンピックのナショナリズム過剰に反対している人物」で、「オリンピックは、あくまで個人のものだ。個人が金メダルをもらうのであって、国家がもらうのではない。国歌をならすのも、国旗をかかげるのも止めてしまえ——そういった主張をもっている」が、ブランデー自身「しかし、その主張はなかなか通らないね」と発言したことも紹介している¹⁴⁾。おそらく「新興国のナショナリズム」を支持する小田にとっても、ブランデーの国歌国旗廃止案は一概には賛同できないものであったのだろう。

2. 奥野健男と山口瞳

『太宰治論』により文芸評論家としての地歩を

築いた奥野健男(1926－1997)。「オリンピックというのは、ぼくの中にあるナショナリズムの高低の測定器みたいな感じがあった」と奥野はいう¹⁵⁾。小学生の頃に観たベルリンオリンピックの記録映画『民族の祭典』の印象が「余りに強烈」で、また一九四〇年に開催が予定されていた東京オリンピックのために修身や体育の授業の度に「日本人の公德心のなさ——たとえば観客席に紙くずをちらかして帰ることを世界の最優秀民族である日本人として外国人に対してははずかしいと繰り返し教えこまれた。オリンピックは太平洋戦争時のナショナリズムと、オーバーラップしてぼくたちには記憶されている。ぼくたちがオリンピックに複雑な気持ちを持つのは当然であろう」。

周知のように1940年に開催が予定されていた東京オリンピックは、日中戦争によって返上され、替わってヘルシンキが開催都市となったが、それも第2次世界大戦の勃発によって中止となった。次の1944年も中止となり、オリンピックの再開は第2次大戦の終結後、1948年のロンドン大会である。しかし、12年ぶりの開催となったこの大会に第2次大戦の枢軸国であったドイツと日本は招待されなかった。両国のオリンピックへの復帰は、次の1952年ヘルシンキ大会からである。ドイツと日本は、その戦争責任ゆえに世界のスポーツ界から重いペナルティーを科せられたのだ。このようにオリンピックには、戦争の傷跡が鮮明に刻まれているのであり、その歴史自体が日本の戦争責任を想起させるものとなっている。

奥野の視点はより深いところに置かれている。オリンピックが「太平洋戦争時のナショナリズム」と一体となって機能していたこと、それを問題としているのである。東京大会の開催準備段階で学校で教え込まれたこと、東京大会の返上、そして映画『民族の祭典』の記憶がこうした評価を生み出しているのだが、それらは国民を戦争へと導いた狂信的なナショナリズムと強固に結びついていたというのである。

奥野にとってその印象が「あまりに強烈」だという『民族の祭典』は、日本では1940年8月に一

般公開され、爆発的な人気を呼び、戦前で最大の観客動員数を記録した¹⁶⁾。同映画の観覧は、国家政策とも結びついており、全国各地の小学校高学年や中学生が教師の引率のもとで観覧した。文部省推薦映画に指定されたことがこうした団体鑑賞を生み出したのだが、文部省は「観覧指導上の注意」として、「スポーツの外面的昂奮」だけでなく、「組織的で雄大なドイツ精神と重厚にして華麗なドイツ的感觉」という点に最大の力点を置き、これを児童・生徒に理解させねばならないと指示している。それは、ナチス・ドイツがデンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギー、フランスを相次いで降伏させ、これにイタリアも参戦し、さらに日独伊三国同盟が締結されるという第2次大戦の戦局の展開の最中の出来事であった。『民族の祭典』は、日本が枢軸国の一員となって第2次大戦に参戦していく道先案内役となったのである。

たとえば、当時小学生だった篠田正浩(1931—)は、『民族の祭典』を観て「はじめて日本のために死んでもいいという、自分のなかに湧き起こったナショナルな感情の高まりを覚えた」¹⁷⁾と語っているが、オリンピックは「ぼくの中にあるナショナリズムの高低の測定器」という奥野の場合もおそらく同様であったのだろう。では、自身が体験した「太平洋戦争時のナショナリズム」を基準として、奥野は東京オリンピックにどのような評価を下したのだろうか。

奥野は、「なにやかやとオリンピック騒ぎに文句を言いながらも、いざはじまるとテレビの実況放送から離れられず、逆に家人から文句をいわれる」ことになる。奥野の「複雑な気持ち」を融解させたのは、そこに新たな日本人の姿を見出したからであった。

だがオリンピックの開会式の入場行進は始まると、ぼくたちの心は素直に感動した。それは日本人だけ立派であれと言うのではなく、かつてない豊かさ、たのしさを持って、各民族よ立派であれという気持ちであった。インターナショナリズムの中で、ナショナリズムを公平に客観的に感じる場所に、いつ

のまにか日本人は達していたらしい。それはゆえない民族的人種劣等感からの、そして逆投影の優越感からの解放である。

ぼくはこれだけが敗戦そして戦後の体験を経て、日本民族が獲得し得た最大のチエではないかと思う。負けることに平気になった民族、自分の民族を世界の中で客観的にひとつの単位として見ることのできるようになった民族は立派である。

東京オリンピックの開会式には世界93カ国の選手が参加し、その模様が衛星中継で世界各国に放映されたが、それを観た奥野の内面に湧き起こったものは「各民族よ立派であれ」という感情であった。奥野にとってそれは、「インターナショナルリズムの中で、ナショナルリズムを公平に客観的に感じる場所」に立ち、戦時のナショナルリズムから脱け出した日本人の姿を実感させるものであった。開会式を観て湧き起こった内なるナショナルリズムを「測定」し、奥野はこのような自己診断を下したのだ。そして「いつもなら大勢に異をたてるヘソ曲がりの文学者たちが、意外に率直に今度のオリンピックを肯定し、たたえているのも、そういう日本人に対する安心感からであろうか」と付け加える。

奥野がいう「ヘソ曲がりの文学者」とは、たとえば作家の山口瞳(1926-1995)だろうか。国立競技場でマラソンを観戦した時の心境を山口は、次のように語っている¹⁸⁾。

私は日の丸の旗というものにある種の抵抗感をまだ捨てきれずにいる。しかしこの日は私のような気持ちのものでもだれでもいばっていい気分での丸を掲げただろう。それがオリンピックのいいところだ。

韓国の人たちが大勢着飾って、ならんでいる。この人たちもきょうはいばってなんらの抵抗感もなく朝鮮服を着ただろう。それがいいところだ。私は朝のうちにすでに胸がいっぱいになってしまった。

山口は、オリンピックにおいては、自身が抱えてきた日の丸に対する抵抗感も、また、在日韓国

人たちが朝鮮服に対して抱えている抵抗感も解除し、民族的なシンボルを誇ることができるという。多くの戦争体験者にとって日の丸は、「あの戦争の悲惨さを思い出さ」せる「軍国主義、国粋主義、侵略主義のシンボル」であったが¹⁹⁾、山口のいう日の丸に対する感情もそのようなものであったのだろう。したがって日の丸の肯定は、かつての戦争の肯定を表明するものとなる。他方、朝鮮服の着用は自身が日本人ではなく韓国人であることを表明するものとなる。しかしオリンピックにおいては、こうした民族的なシンボルが日常の政治性や制約から解き放たれ、選手を応援したり、勝者を讃えるひとつの記号として肯定されている。

山口は、マラソンで日本の円谷幸吉が三位に入った時には、「ツブラヤがついにがんばった。ついに日の丸を国立競技場にあげた。私は胸が痛くなった。拍手をしすぎて原稿が書けない状態になった」という。「オリンピックでは第一回の大会以来その国のメインスタジアムにその国の国旗があがらなかったことはなかった」。円谷のがんばりによって「嫌な新記録」の誕生をどうにか逃れることができたということを知っていたのだ。山口はいう。「戦後になってはじめて、全くなんらの抵抗感なしに、全くのいい気持で日の丸の旗があがるのを見た。ツブラヤ君、ありがとう」。

このように山口の場合は、オリンピックという非日常的な時空間の中ではじめて日の丸への肯定的な感情が生み出されたのである。それは奥野がいうインターナショナルリズムの中でナショナルリズムを公平に客観的に感じられるようになった日本人に対する「安心感」とは次元が異なるものとみるべきだろう。日の丸の戦前的な復活を不可能にするほどに日本人が成長を遂げたという確信は山口にはなかったと思われ、この点は先にみた小田実も同様であろう。戦争体験はそれほど重く人々をとらえていたのであり、奥野のような楽天的な評価は文学者の中ではむしろ稀であったというべきだろう²⁰⁾。

3. 三島由紀夫

次に三島由紀夫(1925-1970)を取り上げてみたい。すでに『金閣寺』などの作品によって作家として国際的な名声を得ていた三島だが、東京オリンピックでは、『毎日新聞』『朝日新聞』『報知新聞』の特派記者として熱心に取材を重ね²¹⁾、誰よりも多く観戦記を書いている。現在においても、その「華麗なる文体」は「他の追随を許さない」²²⁾、「熱を入れてテレビ観戦した一九六四年の東京オリンピックは、年月とともに色褪せたが、三島の文章はあの興奮を思い出させ、独特の目のつけどころで楽しませてくれる」²³⁾などと評されている。

東京オリンピックの開会式で聖火ランナーが点火した瞬間を、三島は次のように描写した²⁴⁾。

彼が右手に聖火を高くかかげたとき、その白煙に巻かれた胸の日の丸は、おそらくだれの目にもしみたと思うが、こういう感情は誇張せずに、そのままそっとしておけばいいことだ。日の丸のその色と形が、なにかある特別な瞬間に、われわれの心になにかを呼びさましても、それについて叫びだしたり、演説したりする必要はなにもない。

オリンピックはこのうえもなく明快だ。そして右のような民族感情はあまり明快とはいえず、わかりやすいとはいえない。オリンピックがその明快さと光の原理を高くかかげればかかげるほど、明快ならぬものの美しさも増すだろう。

このように三島は、日の丸によって湧き上がる「民族感情」について、オリンピックのような明快さを欠いたものであるとし、それを表現することを抑制する²⁵⁾。こうした態度は他の観戦記においても貫かれており、三島は内に湧き上がるナショナリズムを封印したままスポーツが奏でる肉体の美しさを見事な筆致で描くことに邁進していった。

三島は、オリンピックが始まる前に、レスリングと体操の練習風景について『報知新聞』に寄稿し(9月8日・14日)、10月5日～12日には『読売

新聞』で「実感的スポーツ論」を5回にわたって掲載した。開催期間中は、『毎日新聞』『朝日新聞』『報知新聞』の特派員として計9本寄稿している²⁶⁾が、その内容はスポーツの内在的な観察とその華麗な描写に費やされている。日本の女子バレーボールチームが決勝でソ連を破った時でさえ、「日本が勝ち、選手たちが抱き合って泣いているのを見たとき、私の胸にもこみあげてくるものがあつたが、これは生まれてはじめて、私がスポーツを見て流した涙である」²⁷⁾と書くにとどまっている。

三島がスポーツに本格的に取り組みは始めるのは30歳からであり、まずボディビルで肉体を改造し、それを週3日つづけながら、ボクシングをへて剣道を習い始め、東京オリンピックの開催時には剣道3段を取得している²⁸⁾。この「周回遅れ」のスポーツマンという三島の独特の経歴が、アスリートへのリスペクトを生み出し、それが「偏向したナショナリズムには陥らず」アスリートを讃えるという姿勢につながっている、と佐藤秀明は指摘する²⁹⁾。だがそれだけだろうか。以下では、この問題を考えるために東京大会の終了後に行われた大宅壮一、司馬遼太郎との座談会における三島の発言に注目してみたい³⁰⁾。

国旗一つとってみても、こんど日の丸が上ると、すつとすつとところがたしかにありました。(略)日の丸は純潔である、という議論があり、つぎには、日の丸はきたなくてだめだといわれ、それがこんどは、日の丸はよごれてもなおきれいである、というナショナリズムが出てきたんじゃないか、と思う。こういう弁証法的ナショナリズムが出たことはいいことです。

三島はこのように発言している。これは、日の丸をめぐる三島の歴史認識を簡潔に表したものである。戦前戦後の180度の変化をへて現れた「日の丸はよごれてもなおきれい」という感覚を「弁証法的ナショナリズム」と呼んで肯定しているのである。日の丸に対するこうした評価は、次にみるように平和への貢献というオリンピックのあり方と一体となったものであった。

ぼくはオリンピックでいちばん感じたのは、ナショナリズムと平和の問題でね。開会式、閉会式を見ている、観念的な平和じゃなくて、非常に日常的、具体的な平和の観念があれで与えられたと思うんです、つまりナショナリズムと平和がうまくあったのは、これがはじめてじゃないかな。(略)

とにかく閉会式のときに、ワートと選手が肩を組んで出てきたときは、感動的だった。あそこでナショナリズムと平和というのが、はじめて具体的な場面で、ドラマチックに構成された。これは、いままで日本の知識人がみんなこの問題でうまくいかなかったところですよ。それが、オリンピックでは、ちゃんと実現された。

オリンピックが、「具体的な平和の観念」を示しただけでなく、「ナショナリズムと平和」が両立可能であることをも具体的に示したというのである。後者は、先にみた「インターナショナリズムの中で、ナショナリズムを公平に客観的に感じる」という奥野健夫の主張とも重なる。平和とインターナショナリズムに包囲されたオリンピックの中のナショナリズム——それは逆いえば、こうしたオリンピックのあり方が排外主義的なナショナリズムを抑制する心理的な歯止めの役割を果たしていたということも示唆している。三島が内なるナショナリズムを封印して、ひたすらスポーツが奏でる肉体の美しさを描くことに邁進していったことの理由としては、こちらの方が大きいのではないだろうか³¹⁾。

さらに三島は、「日本のナショナリズムの最高潮に達した時期は、有史以来、いつだと思いませんか」という大宅壮一の質問に、「やっぱりこの間の戦争のときでしょうね」と答えたのにつづけて次のように述べている。

ナショナリズムの根本理念は力です。そして、どこの国だって、いまナショナリズムを標榜している国は、核兵器をもたざるをえない。だけど、日本のナショナリズムはちょっと特徴的で、自己破壊的なところがある。ナ

ショナリストになればなるほど、自分の素手で短刀をもって人を殺しに行ったり、自分一人崖から飛びこんで死んだり、腹切って死んだり、そういう非常に無力な、全体の力をたよらないところのナショナリズムになる。こういうナショナリズムは非常に日本的な特徴じゃないかな。

日本のナショナリズムの特徴を三島は「自己破壊的」な点に見出しており、それを核兵器を持たない日本のあり方と重ねているのである。磯田光一は、三島の思想と文学を「西洋的な知性に基づく様式感覚と昭和のナショナリズムの両者に根ざしている」³²⁾と指摘しているが、ここには後者の内容が顔をのぞかせている。三島が民兵的な集団「盾の会」を結成するのは1968年、さらにその2年後には、同会のメンバー4名とともに自衛隊市ヶ谷駐屯地に乱入して、割腹自殺を遂げる。東京大会から6年後のことである。「三島の思想と文学は、晩年には戦後社会へのアンチテーゼとして後者のナショナリズムに賭けた」³³⁾とされるが、三島が語る日本のナショナリズムの「自己破壊的」な特徴についての説明は、その後彼自身が保守しようとしたものの核心部分となり実践されていくことになったのではないかな。

中国の核実験が報じられたのは、東京オリンピックの最中であったが、「そんな雰囲気も相まって、オリンピックの結果、力の宗教というか、力を養わなければダメだというような考え方が、日本国内に相当起ってくる可能性はないですか」「日本も核兵器を持たなきゃいけないという考えかたは？」との大宅壮一の問いに三島はこう答えている。

それは起こらないでしょう。オリンピックというのは無力の宗教だと思う。人間が何も持たないで飛んだりはねたりして、その限界をあらそうわけでしょう。もし足にロケットをつけるとすると、鉄腕アトムじゃないが何百メートルもあがるかもしれない。マラソンにしたって自動車でいけば早いにきまっている。それをつまみ、なんにも道具を使わないでやってみる。肉体の無力の象徴ですね。こうい

う無力の宗教が成功しえたのは、それが平和と結びついているからだろうと思うんです。

オリンピックによって、日本が核兵器をも含む戦力保持の方向へと転換していくようなことはない、と三島はいう。なぜならオリンピックは「肉体の無力の象徴」「無力の宗教」であり、それが平和と結びついているからだ、と。オリンピックを「肉体の無力の象徴」「無力の宗教」と呼ぶのは、自らの肉体だけでその限界に挑むというスポーツのもつ根源的な性格をふまえたものであり、また、オリンピックと平和の結びつきとは、東京大会が「具体的な平和の観念」だけでなく「ナショナリズムと平和」が両立可能であることを示したという先の三島の発言を前提としたものであろう。

三島は、日本のナショナリズムの性格を語る際に核兵器を持たないことを例としてあげていた。オリンピックの「無力」さと日本のナショナリズムとの共通性が示唆されているのである。三島は日本のナショナリズムの「自己破壊的」な性格を語る際、先にみたように「非常に無力な、全体の力をたよらないところのナショナリズム」という表現を用いていることから、三島にとってオリンピックそしてスポーツは、日本のナショナリズムの性格とも重なるものとしてとらえられていたと考えられる。だとすれば、自らの肉体だけでその限界に挑む競技者たちについての見事な描写は、実は彼が偏愛する内なる日本のナショナリズムの描写でもあったということになるだろう。三島にとってそれは、日の丸や日本選手の活躍によって呼び覚まされた心情を描くことよりもおそらく価値あるものであり、また、平和と結合したオリンピックの観戦記としてふさわしいものであるととらえていたのではないだろうか。

4. 平林たい子と曾野綾子

作家の平林たい子(1905-1972)が示すナショナリズムの問題は、これまでにみた4名の文学者たちとは異なる。平林は、試合を観戦する中から

ナショナリズムを強いる国家の存在を感じ取り、国家意識によるスポーツの支配という問題を抽出し論じているからだ。

平林は、柔道無差別級の神永とヘーシングの試合には、「中世の真剣勝負を思わせる陰惨さ」があり、一回戦を見ただけでテレビを消したという³⁴⁾。両者の力のちがいは明白であり、「真剣勝負に負ける同胞のいたましい挫折の姿を見るにたえなかった」からだ。それに対して、同日の夜に行なわれたソ連と日本の女子バレーボールの決勝も、「もちろん負けてよい勝負」ではなかったが、「こちらの方は、君が代とか日章旗とか金メダルとかいう仮定の言葉が安易にいえるだけかえって、スポーツをスポーツとして扱っていたように思う」。他方、「柔道は、たった一回の君が代や一個の金メダルでは象徴できない大きく深刻なものを賭けていたのではあるまいか」、「この二つのムードのちがいはオリンピック・ゲームを貫く二つの意識を現わしているように思う」という。それはどのようなものか。

この場合、この深刻なものというのは、ある男子の生涯の事業や、ある集団の存在の根本的な権威に触れるものである。決して、いま世界のスポーツ界の背後に忍び込もうとしている強い国家意識にすぐ結びつくようなものではない。が、スポーツがスポーツ外の意識にまで発展したところで競技が行なわれたため、強い国家意識がスポーツを支配するときと、ひどく似た作用をしていた。スポーツが他の対抗意識と一緒にちがちなものだというのを、このときにも私はつよく感じたのである。

要するに女子バレーボールとは違って、柔道の試合は、選手個人の人生や柔道組織の権威を賭けたものとなっており、そのことが強い国家意識によるスポーツ支配に似た状況をつくり出しているということだろう。

「強い国家意識とスポーツ」が結びついた例として平林は、ステート・アマと呼ばれ国家から称号をもらっているソ連の選手をあげている。そし

て重量挙げの三宅選手が「金メダルをもらった瞬間、自衛隊から位を昇進させられた」ことを取り上げ、「いまの自衛隊は、こういうことで声価をあげようとしているのだろう。それ自体がつよい国家意識とはいえないにしろ純粋なスポーツ意識では決してないものである」と指摘する。こうして平林は、二つの力が選手たちを動かしているという。

大部分の選手は国際競技では国家意識と、スポーツマンシップとの二つの少しちがう次元の求心力に動かされて競技しているものであろう。こんなときスポーツマン意識だけが完全にスポーツを動かしていないように、つよい国家意識がスポーツマンを支配し切ることもむずかしい。それがスポーツのもつある種の抵抗力である。

選手が国家意識に完全に支配されることはないが、それから自由になることもできないというのである。平林は、「あらゆる選手がもっていて当然」の「あたりまえの国家意識や国民意識」を問題にしているのではない。

日本では、日章旗に対する記憶が、第二次大戦でけがされたため、国家の象徴に対する愛情がうすれていた。こんどは、それを回復するよい機会であったのと同時に、スポーツを見る国民にはスポーツを通じて、国民の中の不必要なまでの分裂が一つのものになろうとするよいチャンスだった。

平林は、国家の象徴としての日の丸を愛する感情は、肯定すべき「あたりまえの国家意識」とみなしており、むしろオリンピックを機にそれが国民的な合意にもとづいて回復することを望んでいるのである。こうした次元の国家意識ではない、おそらく死をも厭わない国家への忠誠心といった戦時下の狂信的なナショナリズムのようなものを平林は、「強い国家意識」と想定し批判の標的に据えているのではないだろうか。そして、それと同レベルのものが柔道無差別級の決勝戦を規定し、試合をひどく深刻なものにしたというのが、平林の批判の矛先だったのではないか。

他方で平林は、国家意識がスポーツマンを完全に支配していないことを示す例として「閉会式のたのしい混雑ぶり」をあげている。「国家が着せてくれたユニホームを着込んでいるけれども、要するに彼ら自身として各民族の中にまじり込んでいるのである。国家を超えた民族の悠久性といったものさえ感じた」。同じ場面を三島由紀夫は、「ナショナリズムと平和というのが、はじめて具体的な場面で、ドラマチックに構成された」と評したが、閉会式と日の丸に対する評価について、両者はきわめて近い位置にあったといっているだろう。

国家意識によるスポーツの支配という問題については、曾野綾子(1931-)も鋭い指摘を行なっている。水泳女子100メートル背泳は、日本の田中聡子にメダルの期待がかかっていたが、惜しくも4位だった。優勝したアメリカのファーガソンとの差は0.9秒。この試合を観戦した曾野は、表彰式でのファーガソンの表情の変化を次のように描写した³⁵⁾。

その小さな男の子のような顔に、アメリカ国歌が演奏された時、急にソバカスが、かっくと赤くうきでたように見える。そのつぎの瞬間、彼女は耐えられなくなったように、両手で顔をおおった。国家の榮譽という化け物が、かわいい娘の子にオンブオバケのよにとりついて泣かせたのだ。

曾野は、「国家の榮譽」を「化け物」と強烈に批判した。さらに曾根は、男子体操競技の観戦記³⁶⁾の中で、自分から最も近いところでなされているあん馬やつり輪などを観戦しながら、オリンピックの現状についての批判的な思索を披露する。

かつて、スポーツをやる青年たちは、オリンポスの山にいる神々に、己が技術をささげた。人間の世界から一段とびぬけた信仰にささえられたという点では彼らは高貴であった。しかし今のオリンピックは違う。そこには技術を神にささげるという信仰心はない。人と人との競争がその関心の第一の要素を占めるようになった時、オリンピックは墮落したのかも知れない。

技術を国家にささげているという言い方はあるかも知れない。しかし国家というものは、その呼び方の荘重さの割には、あいまいな内容を持っている。たとえば相手と殴り合うという行為が、国家の榮譽をかけたスポーツであれ、母校の名誉のための試合であれ、暴力団の××組のナワバリ争いのケンカであれ、そうそう本質的には違わないように思えるのは、私が女だからなのだろうか。

曾野は、そう言ったあと「その点、体操というものは、闘争の要素がうすいのがいい」といい、日本の小野選手があん馬で「小さな失敗」をしたのを「自然で人間的な、美しいエラーであった」と評した。さりげなく、しかし実に鋭く、競争至上主義や国家によるスポーツの支配を批判し、それから少し距離をおいているように感じられる体操競技の世界を、「人間的」な感性で「失敗」をも美しいものとしてやさしく包み込み描いてみせたのだ。

5. 石原慎太郎

1955年、大学在学中に『太陽の季節』によって芥川賞を受賞し、さらに作品の映画化によって一躍アイドルとなった石原慎太郎(1932-)。次の文章は、その石原が東京オリンピックの開会式について書いたものである³⁷⁾。

私は以前、日本人に希薄な民族意識、祖国意識をとり戻すのにオリンピックは良机であるというようなことを書いたことがあるが、誤りであったと自戒している。民族意識も結構ではあるが、その以前に、もっと大切なもの、すなわち、真の感動、人間的感動というものをオリンピックを通じて人々が知り直すことが希ましい。

開会式の感動は、オリンピックを日本人の民族意識回復の機会にせよ、というそれまでの石原の持論を修正させるほどのインパクトをもったのである。さらに石原は、「優勝者のための国旗掲揚

で国歌斉唱をとりやめようというブランデー[IOC会長——引用者注]提案に私は賛成である」と宣言する。

オリンピックにあるものは、国家や民族や政治、思想のドラマではなく、ただ、人間の劇でしかない。

その劇から我々が悟らなくてはならぬ真理は、人間は代償なき闘いのみでこそ争うべきであり、そのみが人間の闘いであるということである。

その闘いこそ美しく、真に雄々しく壮麗である。

そして日本の選手の勝敗を第一の関心とするような態度を捨てることを提案し、「民族とか国家とか、狭い関心で目をふさがれ、この祭典でなければ見ることが出来ぬ、外国人対外国人の白眉の一戦を見のがしてしまうことも最も愚かしいことと思う」と訴える。

石原は、このようにオリンピックの理念に全面的に賛同し、かつての自身の持論を捨てて、オリンピックを民族意識の回復の機会とすることを否定した。だが、石原は、日本期待の水泳陣の惨敗をみて、その5日後には早くも主張を変える³⁸⁾。日本選手のふがいなさが、「われわれに欠けているものはなになのか」という問いを生み出し、一度封印したはずの石原の内なるナショナリズムが噴出し始める。

重量あげの初日、バンタムで優勝したソ連のワホーニンが、解説者がまず無理だろうといった自己の最高を上回る重量をあげきり、よろめきながら必死に持ちこたえ、観客の騒声に片足をあげて誇示しかえしたあの根性はいったい、なにによってつちかわれるものだろうか。解説者は、彼らが胸の内にしまい、その背に無形に背負っているものの違い、国家民族への意識だと説いていたが、あるいはそうなのかもしれない。(略)

その背へ無形に背負っている、なにものかへの連帯感、その責任ということなら、国家や民族に対してでなくてもいい、母校でも、

所属クラブでもいい。しかし結局、最も強力な使命感を与えるものといえば国家民族ということになるのか。ここに、近代国際スポーツと政治性に関する危険な堂々めぐりがあるわけである。

しかし、日本選手だけがその堂々めぐりを排し、孤独で自由な一人の競技者として国際試合に臨むならば、これは少なくとも現在ではたいへんなハンディキャップを背負ったことにもなるだろう。

こうして石原は、根性を出させ勝利をつかみ取るためには、選手が国家を背負って戦うことが必要である、という結論に行き着くのである。これは、日本選手の姿に国家や民族を背負ったプレッシャーを感じとり、そこからの解放を明に暗に論じた平林たい子や曾野綾子などの主張とは真逆のものである。

そして石原は、ナショナリズムとインターナショナリズムのとらえ方についても、奥野健夫や三島由紀夫とは真逆の方向を志向する。「政治性の完全脱皮ということはヒューマニスティックなインターナショナリズムに通じるものだろうが、しかし、真のインターナショナルなものは、真にナショナルなものを知覚し、確立しえたときでなければ志向できないと私は思う」と。石原はこうして日本のナショナリズムの復活を主張するに至るのだが、石原にとって現実の日本は、彼のめざす理想とはかけ離れたものであった。「日本のこの痴呆的な繁榮の底にあるものは、政治性というよりも、だれがなんといおうと、どうしようも、脱皮できるはずのないナショナルなものを放擲した、無個性な安逸でしかない」。こうして石原は日本の現状に苛立ちを募らせ、

妙な連想だが、いまもし地球が他の天体から野蛮に一方的に攻撃されたとき、地上の民族の中で、一番先に銃を投げ降伏するのは日本人ではないかというような気さえする。

自信がありそうでも、いや、あってもなお、外来者に向かってなんとはなく気弱に微笑してしまう日本人のこの状況を、オリンピック

を機会にこそもう一度自戒し、考え直す必要がある。

と主張するのである。ここで例示した外敵の攻撃から地球を防衛するために命を賭して戦う日本人の姿によって石原は、彼がいうナショナリズムを確立したうえでのインターナショナリズムを示そうとしたのだろうが、自己犠牲を伴うナショナリズムの確立を明確に表明している点には注意が必要であろう。この点でも石原は、本稿で取り上げた他の文学者たちと一線を画している。

以上のような主張をくり広げながらも石原は、意外なことに「もう一度書くが、優勝者への国旗掲揚と国歌吹奏の廃止を唱えるブランデー提案に私は賛成である」というのだが、その理由は、「こう他人の国歌や国旗ばかり仰がされたのではやりきれないから」というナショナリスト的感情論をむき出しにしたものであった。

さらに石原は、「仏作って魂入れず」という言葉があるが、「驚異的に復興し、いまや再び栄えようとしている日本という国に、確かに魂が欠けている」という。「日本という国家に対し、国民に戦前戦中とは違ってさらに新しい共同体への意識をいだかしめる、新しい国家の理念を自家発酵さすべく努力すべきだったのは政治である。政治、政治家はこの責めを怠った」という。ここにはその4年後に自民党から出馬し、参議院議員となっていく石原の政治信条が垣間見える。

石原のナショナリズムの爆発は、その後の観戦記でもまだまだつづき³⁹⁾、日本が勝利した女子バレーボールの決勝を伝える観戦記⁴⁰⁾で、「われわれに欠けているもの」についての自身の確信を披露するに至る。

もしわれわれが、あの一戦を失った時のことを思うと慄然として来る。意識、無意識に日本人が女子バレーにかけていた期待には、他の種目に対すると違ったものがあつた。それはなんといおう、われわれが今日、進歩した文明の便法とすり替えにうしないつつある、目的に向かって身心をはる、要するに努力し戦うということの尊さ、その意味をで

あった。

「鬼の大松」がひきいる、ニチボー・バレーチームに、われわれはひそかに、自分があるが、とりもどそうと願う自分自身の分身を見て来たはずである。大げさにいえば、ある日本人にとっては、女子バレーの敗戦は、第二次大戦での敗戦に次ぐくらい、精神的打撃と成り得たかも知れない。(中略)

われわれは今日の非人間的な、文明の便法の中にうしなわれつつある、人間についての、古い信条をもう一度とり戻すべきだという、確信のよすがを与えられたのである。(中略)

大松監督にしろ、レスリングの八田会長にしろ、彼らが、その信条を証して見せることで、筋金を入れたのは、一人選手にのみではない、と私は思う。その事実が、多くの人間にとって、これから先、どれだけ心のささえに成り得るだろうか。

参加することに意味があるのは、開会式においてのみである。翌日から始まる勝負には勝たねばならぬ。償いを求めてではない。ただ敗れぬために勝たねばならぬ。

人生もまた同じではないか。

女子バレーの決勝戦は、戦後の日本人が失いつつある「努力し戦うということの尊さ」という「古い信条」を教えてくれたというのだ。石原の特徴は、こうした「古い信条」が、国家を背負うことやナショナリズムの確立、日本に欠けている魂や新しい共同体意識の再生などと一体のものとして主張されていることである。当時の文学者の中ではまさに異例の発言だが、こうした石原の異例さについては最後に改めて取り上げることにしたい。

おわりに

本稿で取り上げた7名の文学者のうち、石原慎太郎をのぞく6名の言説には、ナショナリズムへの警戒心、また、自らの内に沸き起こったナショナリズムを表現することの拒否、あるいはナショ

ナリズムを強いる国家との関係への批判等が示されており、ナショナリズムを肯定する場合であっても、「新興国のナショナリズム」や自国選手の勝利に対する素朴な喜びといったものに限定されていた。また、彼らのこのようなナショナリズムに関する態度を根底から規定しているものが、戦時下の狂信的なナショナリズムという共通体験であったことは、曾野綾子をのぞく6名中5名の言説が示唆している。ここには、東京オリンピックによって喚起されたナショナリズムの複雑な内実とそれを根底から規定した戦争という国民的体験の重さが示されているといえよう。

では、なぜ石原慎太郎はこの6名とは異なるのか。この問題を考えるうえで示唆的なのは、1960年に刊行された橋川文三(1922-1983)の『日本浪漫派批判序説』ではないだろうか。日本浪漫派とは、1935年に刊行された同名の文芸雑誌に由来しているが、このグループによる作品は戦時下において狂信的なナショナリズムの傾向をもつようになり、青少年に多大な思想的影響を与えた。筆者の橋川もその影響を受けた一人である。同書の第Ⅰ部は、この日本浪漫派を体系的に批判したものであるが、第Ⅱ部には、戦後の文学状況についての批評など幅広いテーマのエッセイが収められており、そこで石原慎太郎についての執拗強烈的な批判が行われている。

橋川は、『太陽の季節』などの石原慎太郎の作品の基本的な性格を世代論的感性主義と肉体的ロマンチズムの結合としてとらえる⁴¹⁾。世代論的というのは、ある世代——石原の場合は「戦後世代」「戦後派世代」⁴²⁾——の自己主張という性格を指すが、それが「肉体的、生理的若さ」を強調し、「その肉体理念の神秘化やロマン主義化に傾きやすいのも当然」であると橋川はいう⁴³⁾。また、感性主義については、橋川自身による明確な定義が示されていないが、理性や意志よりも、感覚や感情、実感を重視する傾向を指すものと思われる。石原作品の映画化によってブームとなった「太陽族」——既成の秩序にとらわれず奔放無軌道に行動する戦後派青年の典型——がそれを象徴するも

のといっいいだろう。

そして橋川は、石原の作品では「青年の特権である肉体主義、肉体的宇宙観の放埒、実感的情念的行動力を振り廻すこと」の礼賛がなされており⁴⁴⁾、それは戦前の日本浪漫派の代表者の一人芳賀檀ときわめて類似しているという。そしてそれらがもつ問題性について次のように主張する。

芳賀においては、この肉体的礼賛は、排外的民族主義を媒介として、生理的に老廃した中国にたいする「若い日本」の侵略の正当化へと発展するし、石原においては、その「実感的情念的行動力」は、政治的危機意識を媒介として、国務大臣中曾根康弘と独裁政治の礼賛へと傾斜する。「深い夢をはらんだ強い政治」への憧憬こそ、かつて昭和十年前後の「時代閉塞」状況において、日本を民族主義的ロマンチズムの破壊過程にみちびいた生理衝動に他ならなかったが、石原がその発想の歴史的無効性に無知なことはおどろくべきである。

この批評は、石原の作品だけではなく、石原の実際の行動や発言をもふまえてなされたものである。橋川は、石原が国務大臣中曾根康弘に捧げた日本改造のための詩を取り上げ、そこに示されている「老朽した舟板を破って、新しい樹が生長する。その樹をもって新しい船を造ろう」という発想は政治と権力状況に対する素朴な有機体論的把握を暗示している」とし、さらに石原の「政治把握」を「生の哲学とロマンチズムとアニミズムの混合」のようなものと指摘している⁴⁵⁾。

また、座談会の中で、橋川に対して石原が放った「戦争々々と繰言をいうよりも現実の過酷さを直視せよ」⁴⁶⁾という発言などをとらえ、「感性的な現実主義者」は「戦争体験という発想をも同様に感性化し、実体化してしかうけとることができない」⁴⁷⁾「問題は『歴史意識』ないし『歴史責任』の次元で振出されているのに、かれらにおいては、それは心理もしくは、実感のカテゴリーでしか受取られていないということである」⁴⁸⁾と指摘し、次のように批判する。

しかし、もし「戦争」をそのようなレベルでしかうけとりえないならば、現代における戦争の「不在」もまた、同様に内閉的で実感密着的な次元でしかうけとられないであろう。(中略)現在の「平和」に焦燥を感じ、危機感と停滞感にみたされていることはもちろん了解される。しかし、(中略)ぼくは、かれらのその焦燥は、「平和」を「平和」としてしか実感しえないかれらの意識形態そのものに由来すると思うし、いいかえれば、かれらがいまだに「戦争」をとらえないことに関連していると思う。(中略)かれらが「戦争」と「平和」をあわせたものにたいし責任を感じえないならば、かれらは結局歴史における子供であることをいつまでも希望する種類の存在ということになるだろう。一人前の文学者にそのことは許されないであろう(後略)

以上のような橋川の石原批判を下敷きにして、改めて石原の東京オリンピックについての言説をみると、橋川が指摘した石原の特徴のいくつかの中にも、明確に示されていることが確認できよう。オリンピックを民族意識の回復の機会とすべきであるという自己主張をめぐる朝令暮改的な転換、戦後の日本社会や政治の現状に対する危機意識を媒介にして表明された自己犠牲を含むナショナリズムの確立、国家を背負い努力し戦い勝利することへの礼賛などは、感性主義や実感的情念的行動、国家権力への接近といった石原の特徴と見事に呼応しているといっいいだろう。

そしてその根底にあるものもまた、橋川が指摘する「歴史意識」「歴史責任」の欠落であったことは、本稿で取り上げた他の文学者の言説との比較によって明らかであろう。それこそが、他の文学者のナショナリズムに対する態度との決定的なちがいを生み出した根本的な要因であると考えられる。

その石原がその後東京都知事となり、2020年の東京オリンピック招致のキーパーソンとなった。2020年を目前にして、私たちはそのことの意味を、改めて考えてみる必要があるのではないだろうか。

【注】

- 1) ロバート・ホワイティング(玉木正之訳)『ふたつのオリンピック——東京1964 / 2020』角川書店、2019年、p.147
- 2) Christian Tagsold, *Die Inszenierung der kulturellen Identität. Das Beispiel der Olympischen Spiele Tōkyō 1964*, München: Iudicium, 2000. 石坂友司「東京オリンピックと高度成長の時代」『年報日本現代史』第14号、2009年、石坂友司・松林秀樹編『一九六四年オリンピックは何を生んだのか』青弓社、2018年など。東京オリンピックの神話化、再神話化の問題を社会的に考察したものととして阿部潔『2020』から『1964』へ——東京オリンピックをめぐる〈希望〉の現在」小路田泰直他編『ニッポンのオリンピック——日本はオリピズムとどう向き合ってきたのか』青弓社、2018年がある。
- 3) Christian Tagsold, 'The Tōkyō Olympics as a Token of Renationalization', in Andreas Niehause and Max Seinsch eds., *Olympic Japan: Ideals and Realities of (inter) Nationalism*, Ergon Verlag, 2007. 野毛一起「リニューアルされた日の丸・天皇」天野恵一編『君はオリンピックを見たか』社会評論社、1998年、田中伸尚『日の丸・君が代の戦後史』岩波書店、1999年、pp.79-91、佐藤卓己『輿論と世論——日本的民意の系譜学』(新潮社、2008年)の第7章「東京オリンピック——世論の第二次聖戦」、竹内幸絵「東京オリンピックプレイベントとしての赤と白の色彩」朴順愛・谷川建司・山田奨治編『大衆文化とナショナルリズム』森話社、2016年。
- 4) 講談社編『東京オリンピック 文学者の見た世紀の祭典』(講談社、2014年、初版は1964年12月)、石井正己編『1964年の東京オリンピック——「世紀の祭典」はいかに書かれ、語られたか』河出書房新社、2014年。後者には、この他に岡本太郎のマラソン観戦記と1998年になされた市川崑と沢木耕太郎の座談会も掲載されている。
- 5) 安田武「東京五輪が近づく国民的熱狂の中での疑念」『新潟日報』1964年10月8日付(水出幸輝「警告する新潟地震——オリンピックを介した二つの『破壊』」(前掲『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』p.243)
- 6) 拙稿「文学者たちの東京オリンピック批判——もうひとつのレガシー——」、坂上康博・來田享子編『1964年の記憶』青弓社、2020年刊行予定。
- 7) 以下、小田実「“世紀の祭典”五輪の現実」『時』1964年12月号、前掲『東京オリンピック』pp.387-388。
- 8) 「64年東京五輪はバラ色だったか 消された負の記憶 繰り返される恐れ」『東京新聞』2019年10月9日。
- 9) 当時10歳だった波多野勝も、著書『東京オリンピックへの遙かな道』(草思社、2004年)のあとがきの中で、「期待していたにもかかわらず水泳は惨敗だった」と述べている(p.243)。後述するように石原慎太郎も、日本の水泳の惨敗によって自らの主張を全面的に変えた。当時のメディアは、「正直にいつて日本が金メダルをねらえる種目は、男子二百メートル平泳、同二百メートル背泳と女子二百メートル背泳の三つしかない」(高知新聞社編『オリンピック東京大会特集No.1』高知新聞社、1964年9月7日、p.14)といった比較的冷静な見方も示していたが、人びとの期待はそれを上回るものであったのだろう。
- 10) 前掲『ふたつのオリンピック』p.140。
- 11) この点は、「オリンピックで自国の旗がひるがえるのを喜ばない国民が一人でもあるだろうか。それは人間の本能と言ってもいいだろう」とする1960年9月9日付『産業経済新聞』の社説「『愛国心』ということ」の主張などとも一致するものであり、当時の一般的な国民感情に近いものであったと思われる。
- 12) それとともに小田は、「私たちは、同時に解

- 毒剤を用意してかかる必要がある」とし、その一例として「オリンピックを運動会だとみなす考え方」を提案する。「みんなが歩調をそろえてはいつて来て、みんなが列を乱さないで、みんなが国旗に注目し、ナショナルリズムに涙を流し、金メダル、金メダルとさわぎ、惜敗、涙、ファイト、根性、気合……といったことでは、どうにもこうにも首筋がいたくなるというしだいである。オリンピックとは、つまり世界の運動会であって、それ以外のことではないのだ。運動会は、もともと、気楽なものだ」（前掲「“世紀の祭典”五輪の現実」pp.377-378、389）。
- 13) 上山春平『日本のナショナルリズム』至誠堂、1965年、p.110。当時のナショナルリズムに関する研究状況については、浦野起央『ナショナルリズム——研究動向と文献』アサヒ社、1965年、参照。
 - 14) ブランデー提案については、黒須朱莉「I O Cにおける国歌国旗廃止案の審議過程（1953—1968）——アベリー・ブランデー会長期を中心に」『一橋大学スポーツ研究』第31巻、2012年、参照。
 - 15) 以下、奥野健男「オリンピック賛」『読売新聞』10月14日、前掲『東京オリンピック』pp.261-263。
 - 16) 以下、拙稿「戦時下の映画と国家——1940年上映の『民族の祭典』をめぐる——」田崎宣義編『近代日本の都市と農村——激動の1910—50年代』青弓社、2012年、pp.227-258による。
 - 17) 篠田正浩「スポーツと映像」、学校体育研究同志会第104回全国研究大会記念講演、1992年8月4日。
 - 18) 山口瞳「ツブラヤ君、有難う」『報知新聞』10月22日、前掲『東京オリンピック』pp.161-162。
 - 19) 「日本のトレードマーク『日の丸』掲揚復活をめぐる」『週刊サンケイ』1958年10月12日号、前掲「東京オリンピックプレ・イベントとしての赤と白の色彩」p.110より再引。
 - 20) 戦争体験の重さを示ものとして、杉本苑子「あすへの祈念」共同通信10月10日配信（前掲『東京オリンピック』pp.37-39）や石川達三「開会式に思う」『朝日新聞』10月11日（同上pp.26-29）などがあげられる。とくに前者については、内田隆三「成長の時代の幻像——精神史としての東京オリンピック」（前掲『ニッポンのオリンピック』pp.185-188）や浜田幸絵『東京オリンピックの誕生 1940年から2020年へ』吉川弘文館、2018年、pp.220-222などでも取り上げられている。
 - 21) この時の取材ノートは、工藤正義・佐藤秀明・井上隆史により翻刻され、「未発表『オリンピック』取材ノート（全）」と題して『三島由紀夫研究⑮』（鼎書房、2015年）に掲載されている。
 - 22) 石井正己「作家たちの東京オリンピック」、前掲『一九六四年の東京オリンピック』p.209。
 - 23) 佐藤秀明「解説」同編『三島由紀夫スポーツ論集』岩波書店、2019年、p.300
 - 24) 三島由紀夫「東洋と西洋を結ぶ火」『毎日新聞』10月11日、前掲『1964年の東京オリンピック』p.14。
 - 25) 三島は別のエッセイの中で、「開会式のとき、陛下のいかにもうるわしい御機嫌と、ブランデーI O C会長の懇願を受けて開会宣言をされる堂々たる御姿を見て、私は十九年前の、マッカーサー元帥と並んだ悲しいお写真と思ひ比べ感無量なものがあつた。このとき、十九年前を思い浮かべたの人は私一人ではないと思ふ」と述べているが、ここでも「民族感情」の内実に踏み込むような表現はみられない（三島由紀夫「秋冬随筆」『こうさい』1964年12月、佐伯彰一他編『三島由紀夫全集』第31巻、新潮社、1981年、p.319）。
 - 26) 前掲「作家たちの東京オリンピック」pp.208-209。
 - 27) 三島由紀夫「彼女も泣いた、私も泣いた」『報

- 知新聞』10月24日、前掲『東京オリンピック』p.197。
- 28) 橋川文三「三島由紀夫伝」『現代日本文学館』42、1966年8月、『橋川文三著作集1』筑摩書房、1985年、p.309、前掲佐藤秀明「解説」pp.308-315。
- 29) 前掲佐藤秀明「解説」p.307。
- 30) 以下、大宅壮一・司馬遼太郎・三島由紀夫「敗者復活五輪大会【座談会】」『中央公論』1964年12月号、前掲『1964年の東京オリンピック』pp.122-126。
- 31) 三島のこうした態度については、ホイジンガの『ホモルーデンス』の影響も考慮すべきかもしれない。三島は「オリンピックはやはり『文化的』なお祭りであり、スポーツもまたホイジンガの説のとおり、遊戯としての文化なのであろう」と述べている(三島由紀夫「白い抒情詩」『報知新聞』10月15日、前掲『東京オリンピック』p.99)。
- 32) 磯田光一「三島由紀夫」『日本大百全書』小学館、2001年(電子版)。
- 33) 同上。
- 34) 以下、平林たい子「国家意識と人間」『読売新聞』10月27日付夕刊、前掲『1964年の東京オリンピック』pp.181-183。
- 35) 曾野綾子「女子100メートル背泳 孤独な娘たち」『毎日新聞』1964年10月15日、同上p.72。
- 36) 曾野綾子「体操鑑賞記」『朝日新聞』1964年10月19日、同上pp.84-85。
- 37) 以下、石原慎太郎「人間自身の祝典」『読売新聞』10月11日、前掲『東京オリンピック』pp.33-36。
- 38) 以下、石原慎太郎「欠けているもの」『読売新聞』10月16日、同上pp.272-274。
- 39) 石原慎太郎「遺書とオリンピック」『読売新聞』10月21日、同上pp.300-303。
- 40) 石原慎太郎「『鬼の大松』賛」『読売新聞』10月25日、同上pp.317-321。石原は、同日付『日刊スポーツ』掲載の「聖火消えず移りゆくのみ」(同上pp.216-218)でも、同様の主張をくり返している。
- 41) 橋川文三「戦後世代の精神構造」、同『日本浪漫派批判序説』未来社、1960年、pp.208-209。
- 42) それに対し橋川は、自身を「戦中派」と称している(「世代論の背景」同上p.172)。なお、橋川は、石原をこの「若い世代の代表的存在である」とし、そこに「現代日本の青年に広汎に認められる意識のパターン」や「閉塞感覚」を読み取ることができるとしている(前掲「戦後世代の精神構造」pp.214-215)。
- 43) 前掲「戦後世代の精神構造」pp.208。
- 44) 以下、橋川文三「若い世代と戦後精神」同上p.223。
- 45) 前掲「戦後世代の精神構造」p.207。
- 46) 同上p.205。
- 47) 橋川文三「停滞と挫折を超えるもの」同上pp.248。
- 48) 以下、前掲「戦後世代の精神構造」p.217。ここでいう「彼ら」には大江健三郎も含まれている。